

法華寺の調査

—第363次、366次

1 はじめに

法華寺は、745年(天和7)の平城京遷都に際し、光明皇后が平城宮東院に東接する父藤原不比等旧宅を施入して創建した寺である。はじめは宮寺と呼ばれたが、ついで大和国の国分尼寺に当てられ総国分尼寺とも称された。平安期に衰退したが、鎌倉時代に叡尊が復興し金堂等を再建、その後、戦国期に焼失。再び豊臣秀頼が復興するという長い歴史をもつ。もともとの伽藍中心部は現境内の南側、住宅密集地に広がっており、現在の南門がちょうど講堂の位置を踏襲するという位置関係にある(図183)。

平城第363次調査は、奈良市法華寺町882番地に所在する史跡法華寺旧境内及び名勝法華寺庭園に対して、境内防災施設改修事業としての改修工事を行うのに先立ち発掘調査を行ったものである。期間は平成15年8月4日～平成15年12月24日、調査面積321㎡である。

また、平城第366次調査はその間におこなった鐘楼西側にある池に護摩堂を建設するための事前調査である。



図180 本堂前S B8601付近(東から)

当地に対する既往の調査としては、茶室、茶庭築造にともなう事前調査によって礎石および掘立柱を使用した東西建物がみつかった第79-2・10次調査、境内西南で収蔵庫建設に先立って調査されやはり礎石建物がみつかった第98-17次調査、浴室北側の茶室建設に先立つ事前調査で奈良時代の掘立柱建物が重複してみつかった第151-16次調査などがある。また、本堂、鐘楼の修理の際にも広く調査されているが、当地域の全体像や移り変わりについての所見はいまだ不鮮明な状態にある。

それゆえ、境内を広い範囲で調査する機会として今回の調査はおおいに期待された。しかし、いずれの調査区も消火栓への給水配管や電気の配線工事にとまらざるを得なかった。調査は配管の都合や庫裏の事情などを勘案して、境内北側より開始し南へ進んだが、十分な広さのないところでは地山や遺構面の確認程度にとどめたところも少なくない。

2 基本層序

全体的に北が高く、南に低い地勢で、とくに南東側が大きく下がっている。境内北側でもっとも高い位置で確認できた黄褐色の地山上面は標高68.2mを測るのに対して、本堂前では66.3m前後、浴室南方ではX-145,068付近の66m前後から比較的急に下降し、現地表面より1.8m以上深くなる。このため、調査区南東部では遺構面を確認できなかった。地山の低いところでは、奈良時代以後、中世、近世の各時期の整地がなされているのに対して、本堂前や庫裏北側では現代の上土をはぐと直ちに地山に達するほどであった。なお、本堂前西側に限っては平安時代の層が薄く広がっていた。



図181 S B8690基壇(南から)

3 遺構の概要

以下、主要遺構の確認された地区をとくに取り上げて調査成果を記す。該当する地区には本堂前地区(現境内)、池西側地区、鐘楼裏地区、光月亭周囲地区があり、その他の地区については若干の言及にとどめる。(高橋克壽)



図82 S D8710 (西から)

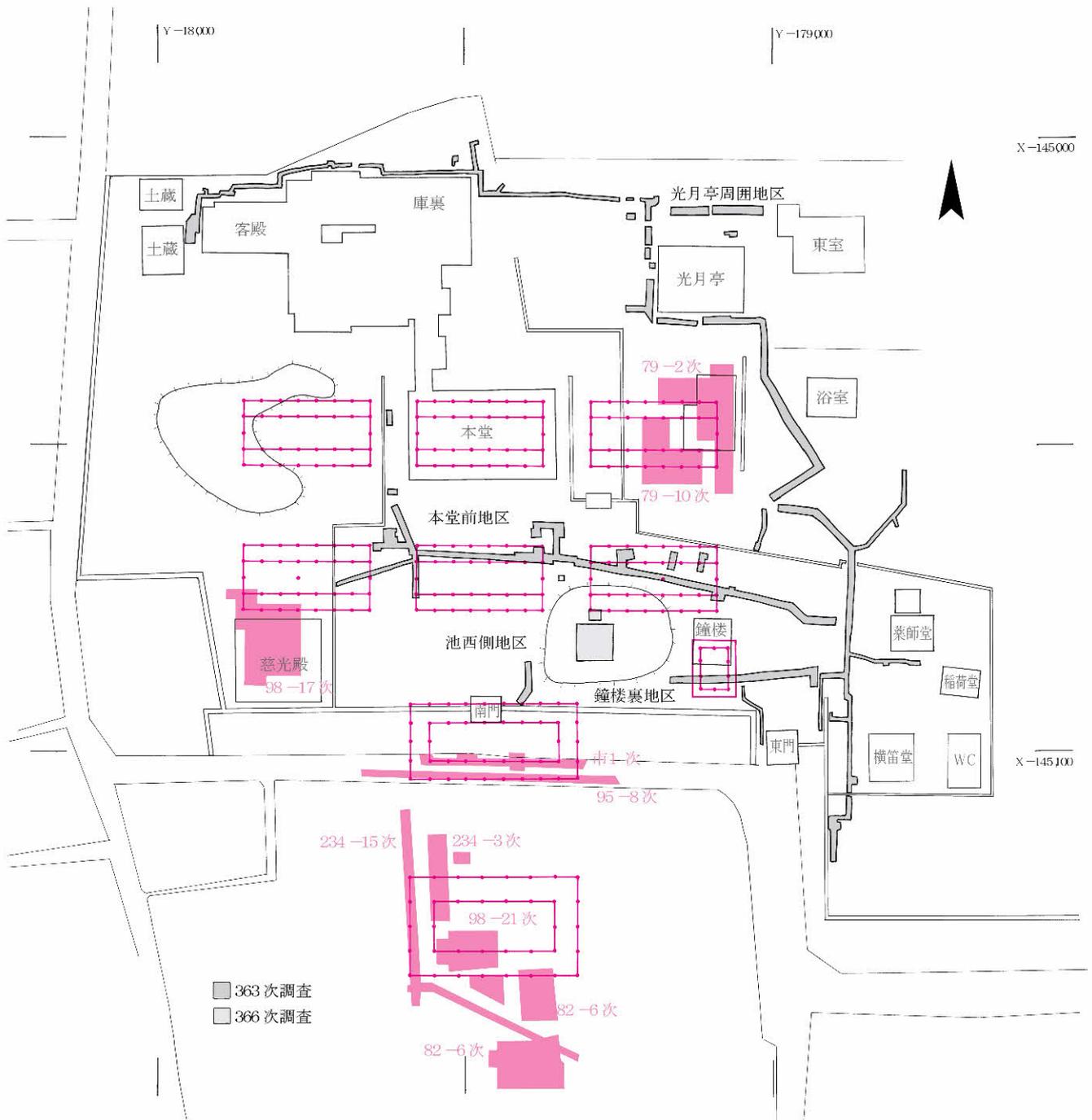


図83 法華寺調査区配置図 1 : 1000

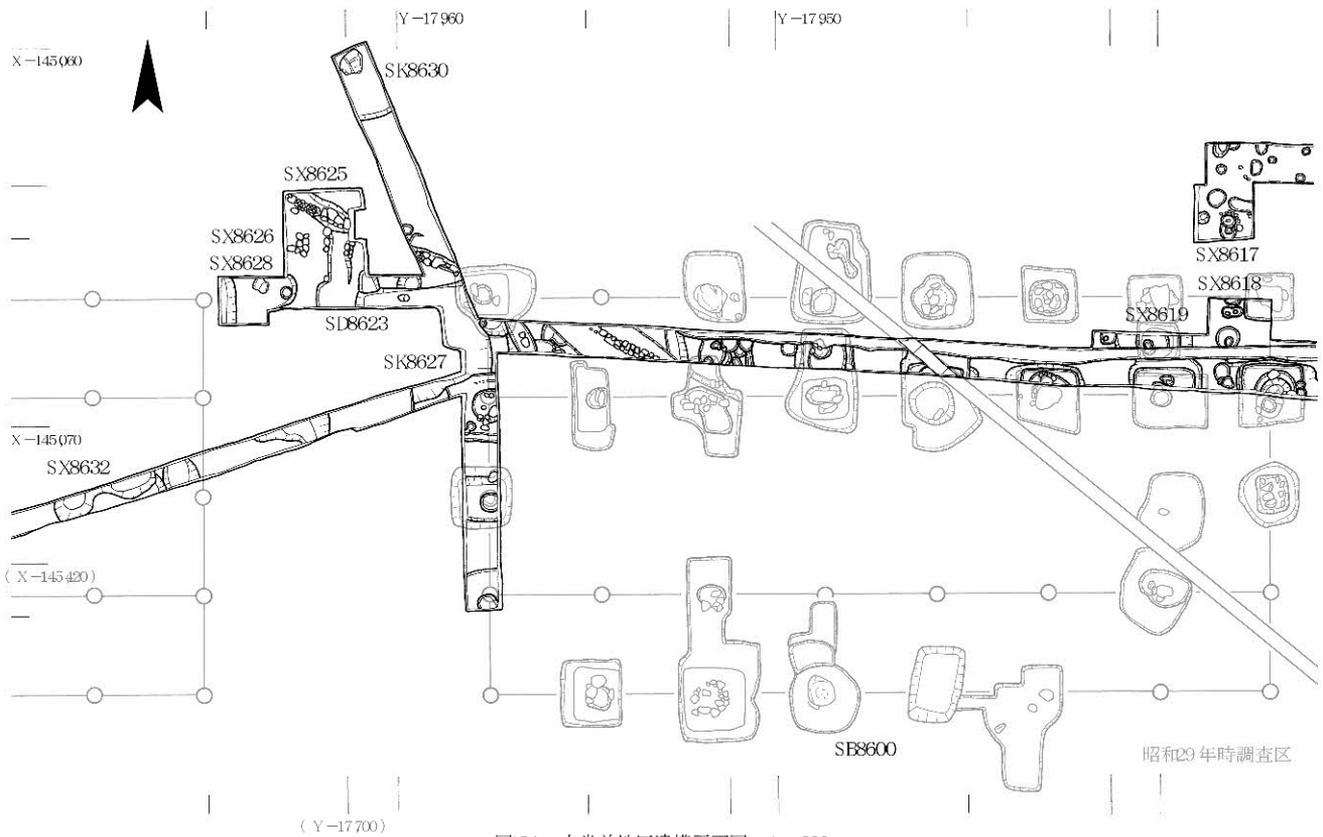


図84 本堂前地区遺構平面図 1 : 200

本堂前地区

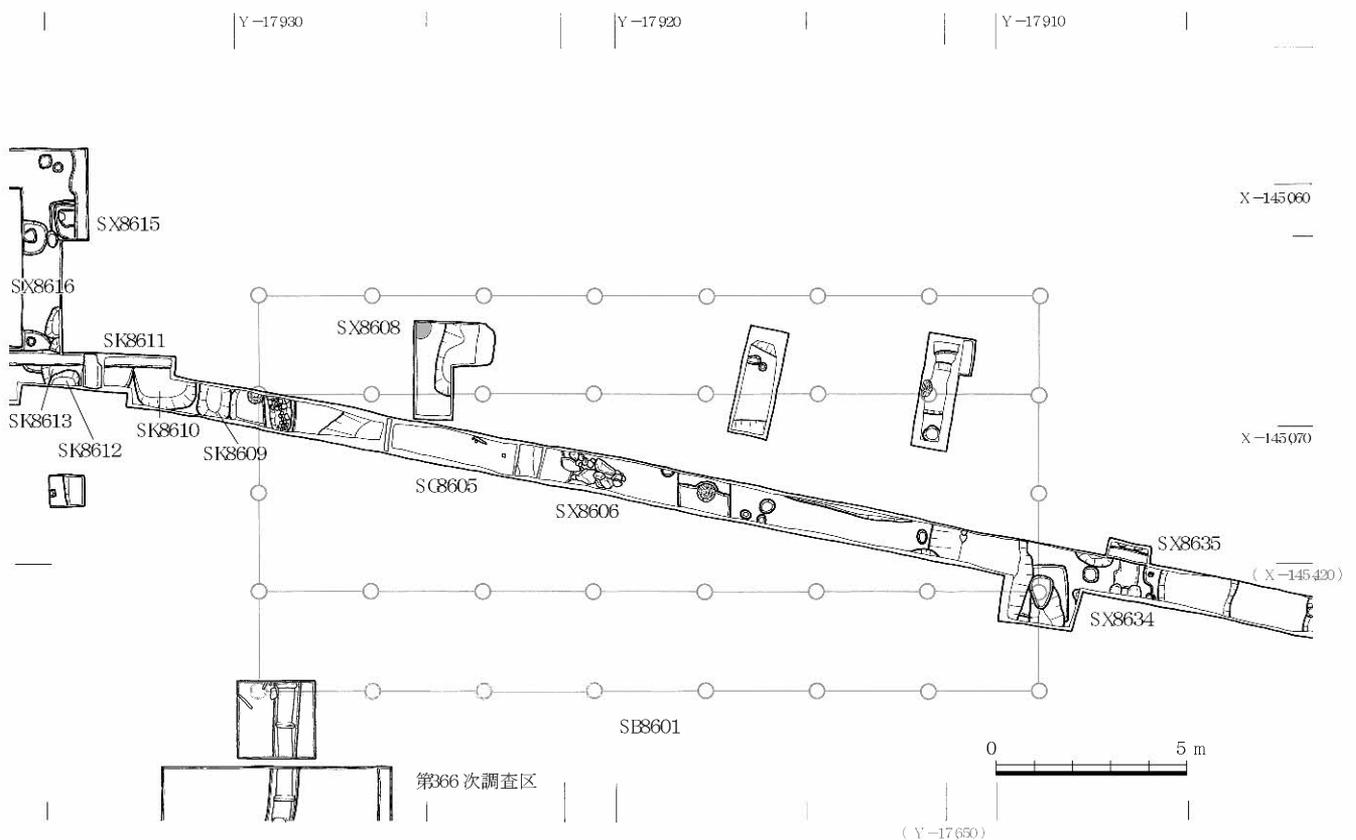
東西棟建物S B8600 本堂前面で確認された4間×7間の二面庇東西棟建物である。柱間は10尺等間。このSB8600は、昭和29年におこなわれた本堂の修理工事にともなう発掘調査で確認されていた(『重要文化財法華寺本堂南門鐘楼修理工事報告書』、奈良県教育委員会、1957年)。今回の

調査でもその存在を追認したことになるが、西側の妻にあたる柱穴のうち、2基は今回初めて検出されたものである。柱穴の一部では柱の腐植痕を確認することができた。また、柱穴の中には掘形の上に礎石の据付痕や根石の残存が確認できるものがあった。したがって、SE8600はある段階で掘立柱から礎石建へと移行したものと判断される。なお、基壇等は確認されておらず、おそらく後世に削平されたものと考えられる。

東西棟建物S B8601 SB8600の東側に位置する建物で、SB8600と同規模の4間×7間の二面庇東西棟建物である。かつて、SB8600の西側で同様の建物が確認されていたことから(第8-17次調査)、その存在が想定されてきたが、今回の調査で初めて確認することができた。今回検出したのは柱穴4基であるが、そのうち1基は建物の中央に位置している。SB8600の西側建物でも同様の柱配置が認められており、間仕切りとして機能していた可能性がある。なお、これらの柱穴では柱根の残りがよく、抜き取りがおこなわれた1基を除くと、いずれの柱穴でも柱根を確認することができた。これらの柱根は直径50cm前後で、残存高も50cm程度あった。掘形の上層では根石や礎石の据付痕が確認されていないが、柱穴そのものを確認できた標高が低いため、もともとあったものが削平された可能性がある。



図85 S B8601柱根の検出状況(南西から)



S X8615・S X8616・S X8617・S X8618・S X8619 いずれもSB8600の北東で確認された柱穴群である。足場や小屋組などといった、何らかの施設の存在を示すものと考えられるが、調査区の幅に制限され、その概要や性格を明らかにすることができなかった。時期に関しては、出土遺物から奈良～平安時代と考えられる。なお、SX8619については昭和29年の調査時にも確認されている。

S G8605・S X8606 近世の池と、その東岸にあたる石組遺構である。18世紀における法華寺の伽藍を描いた『大和名所図会』を見ると、かつて池が鐘楼を取りまくようにして広がっていたことがうかがえる。このSG8605の範囲がその絵図の状況とよく合致していることから、近世の池と判断した。

S X8608 SG8605の北側で確認された焼土面である。炭化物とともに、土器や瓦が出土している。遺物の年代などから、法華寺が戦国期頃に焼亡した際の焼土面と考えられる。

南北溝S D8623 調査区の西側で検出された。北側はSX8625に切られている。一部、石組が護岸状に配されている部分もある。なお、このSD8623の西側には時期不明の石組み遺構SX8626があるが、この石組みがSD8623まで連続していた可能性がある。溝の埋土からは、平安時代の灰釉陶器や緑釉瓦が出土した。

暗渠S X8625 近世の瓦暗渠である。名勝庭園の池から鐘楼西側にある池までをつなぐ役割を果たしていたと考えられる。北西端では石詰め暗渠となるが、途中で鬼瓦を加工した取水口を設け、丸瓦を並べて暗渠となし、平瓦で蓋をする。その平瓦の上層に瓦礫を積んでいる。
S X8628・S K8630 今回の調査区からは2ヶ所で凝灰岩礎石片が出土した。SX8628は土坑などをともなわず、単独で出土した。SK8630では土坑の中から、柱座の痕跡を有した礎石片が出土している。

現在、境内には花崗岩様の礎石が残されているが、修理工事の際に発掘された本堂の前身建物や、SB8600の状況から勘案すると、これらの建物の創建当初に用いられた礎石はいずれも凝灰岩と考えられる。

S X8634・S X8635 SB8601の東側、地表下15cm程度で検出された石組と、その下層から検出された凝灰岩の板石である。両者の関係は明らかではないが、堆積状況等から勘案して、異なる時期のものとして判断した。板石は厚さ5cm程度、幅50cmで、整地土上に据えられている。時期や性格は不明だが、SB8601の基壇外装にともなう可能性がある。

S K8609～8613・8627・8632 いずれも中・近世の土坑である。なかには瓦が大量に廃棄されていた。SK8632では下層から茶碗などの磁器が重なり合って出土した。

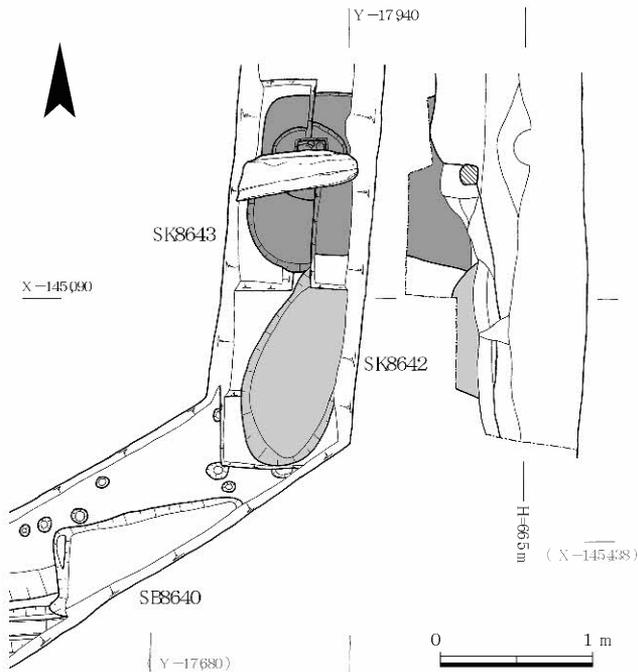


図186 SB8640基壇平面図 1:50

池西側地区

講堂S B8640 基壇は地山を削り出した後、土盛りすることによって形成されている。残存している基壇高は30～50 cmである。基壇の北外縁では、地覆石と延石が検出された。いずれも凝灰岩である。東西軸がやや南北に振れているが、当初からその状態であったかどうかは明らかでない(図186)。

基壇上に立つ建物については、今回方形の柱穴1基のみを確認した。柱の位置はSB8600と1 mほどずれている。昭和62年の発掘調査で確認された他の柱位置も、SB8600の柱位置とは異なるため『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和62年度、奈良市教育委員会)、講堂とその後背に建つ建物群では、建物の中軸線を違えていたことがわかる。

S K8642 基壇に積み土がなされている途中で掘られた土坑である。上層には基壇の積み土が堆積していることから、ごく短期間のみ設けられていたことがわかる。性格等については不明である。

S K8643 基壇の下層で検出された柱穴である。この柱穴には抜取痕が確認されており、基壇築造以前に何らかの建物が存在していたことを示すものである。

鐘楼裏地区

鐘楼S B8650 今回の調査では、大ぶりの根石をともなう礎石据付穴を3基確認した。根石の下を調査したところ、掘立柱の痕跡は認められず、当初より純粋な礎石建だったと考えられる。根石際で出土した土師器皿から、鎌倉時代に建てられたものと考えられる。

基壇は20 cm程度しか残存しておらず、著しく削平されているようである。なお、基壇の東西両外縁には凝灰岩を用いた地覆石が検出された。

先にあげた修理工事報告書によると、同じ位置に創建時の鐘楼を確認したとの記述があるが、今回それに相当するような遺構を確認することができなかった。したがって、その創建時の鐘楼と今回確認できた中世の鐘楼がどのような関係にあるのか、定かではない。

S X8651・S D8652 基壇東側に位置する石組と、それに接する溝である。基壇との位置関係から察して、旧鐘楼にともなう雨落溝と、基壇側の肩を補強する石組と思われる。

S K8644 鐘楼裏地区の西端で確認された土坑である。その位置や土層の堆積状況から判断すると、SC8605と同じく、鐘楼を取り巻いていた近世の池の可能性がある。ただし、急な角度で掘り込まれているため、井戸の可能性も捨て切れない。(林 正憲)

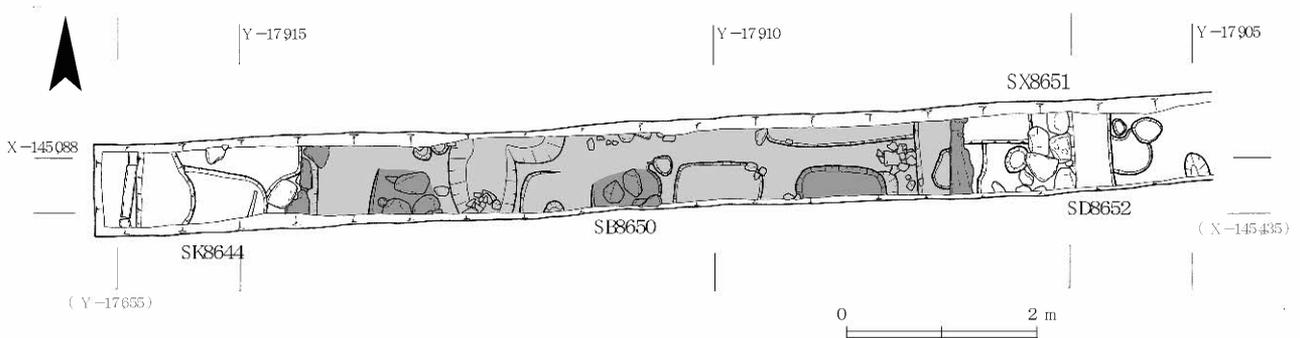


図187 鐘楼裏地区遺構平面図 1:80

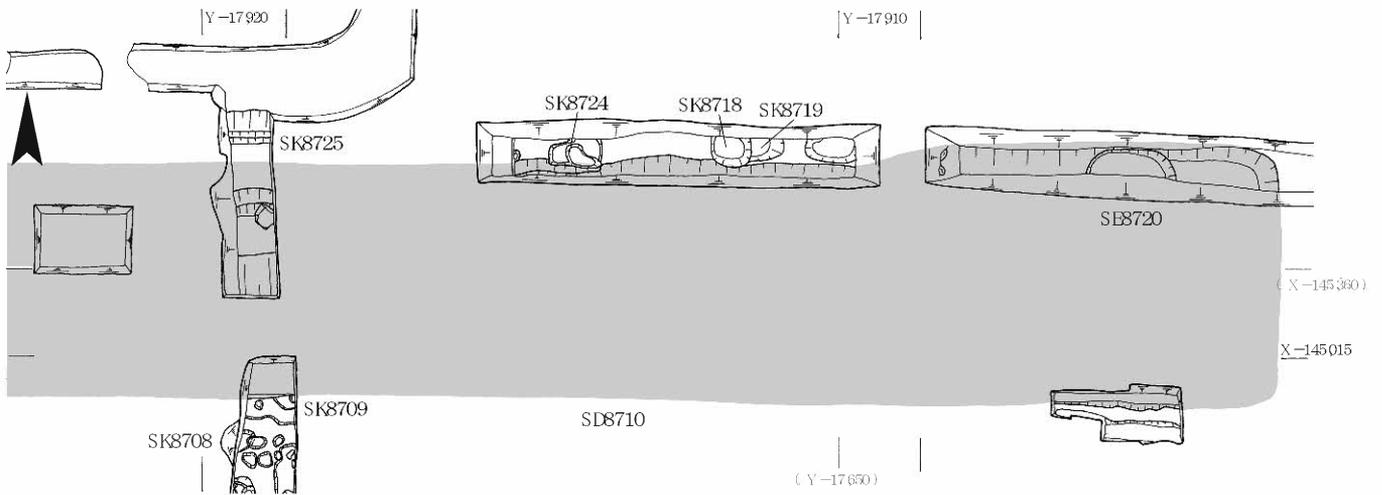


図188 光月亭北側調査区遺構平面図 1 : 120

光月亭周囲地区

東西溝S D8710 光月亭北側のトレンチで約20mにわたって確認した。溝の断面は逆台形で深さ約0.8m、上幅で4mを越える大溝である。溝の最下層には砂、その上に黒褐色の粘土が厚く堆積しており、水が澱んでいた状態を推察させる。この粘土上面から完形の羽釜を中心とする14世紀頃の中世土器(図191)が大量に出土した。溝の東端が調査区内で押さえられており、その東側が通路となる堀状の施設とみられる(図188)。

この溝がこの途切れを隔ててその後、再びどのように続くのかは確かめられなかったが、浴室西側の南北トレンチ北端で検出された南北溝SD8684でも埋土から同様な器種構成の中世土器が出土しており、南へ直角に折れる環濠状を呈していたと考えられる。しかしながらさらに南側は、近世以後の攪乱が激しく、対応する溝を定められない。

なお、このSD8710が埋め戻されたあと、近世の東西溝SD8723やSB8720が重複して掘り込まれている。

建物S B8690 光月亭南側で検出した基壇建物。凝灰岩製の地覆と羽目石下部の残存から判明した。直交する二つの地覆は形態が異なり、階段となる可能性もある。東西方向に敷かれた地覆は、暗渠底石にも見えるが、埋土に砂をもつ東西溝SD8689が直上に重なっており、原位

置を動いている可能性がある。しかし、西側へそのまま続くものでないことは明らかである。基壇自身は地覆の残る東端を残して大きく削平されており、東端を確認できたのみで規模や建物の種類は不明である。

雨落溝S D8702 光月亭から西側に続く渡廊下部で検出した石詰の雨落溝(図189)。SB8690と関係があるかないかは不明である。

その他

境内北西付近では客土より奈良三彩の小片が出土したが、遺構としては中世から近世の穴を検出したにすぎない。また、浴室の西から屈曲しながら南に伸びるトレンチでは幾筋もの溝や大規模な瓦廃棄土坑などを重複して確認した。そのもっとも下層の遺構としては7世紀前半段階の土坑SK8662があり、それを覆うように、奈良時代以後各時期の整地が大規模になされている。また、X-145,080付近にある近世のSK8659からは付札などの数

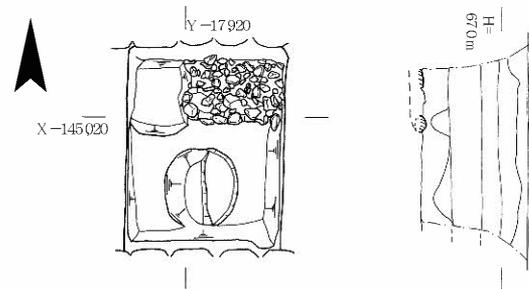


図189 S D8702実測図 1 : 40

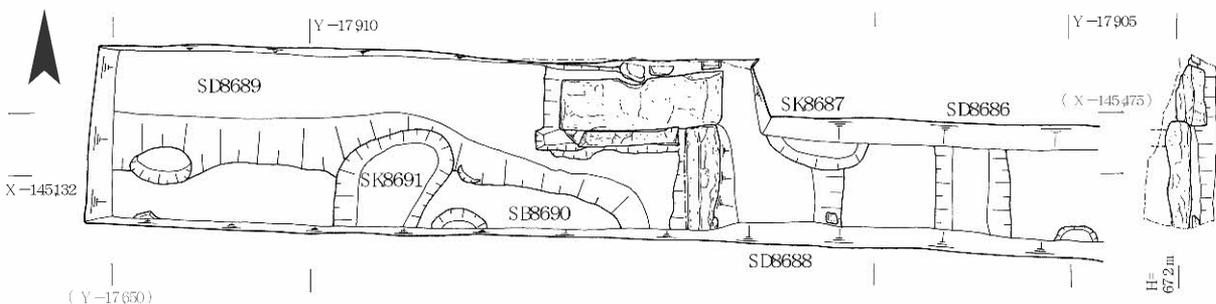


図190 光月亭南調査区遺構平面図 1 : 50

表26 第363次調査 出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦				軒 平 瓦				軒 棧 瓦				
型式	種	点数	型式	点数	型式	点数	型式	点数	型式	点数		
6138	B	10	鎌倉巴	7	6555	1	薬321	15	近世後半	5		
	?	1	室町巴	15	6641	C	1	(緑釉1点含む)	近現代	1		
6225	E	1	中世巴	15	6667	A	8	古代	角棧瓦	1		
6276	G	1	近世前半巴	3		D(緑釉)	1	平安	角棧伏間瓦	1		
6282	Ha	1	近世後半巴	8		?	1	鎌倉				
6284	A	1	近世巴	29	6671	B	3	連珠文	道 具 瓦			
	B	1	巴	29	6675	A	1	巴文	鬼瓦	11		
	?	2	小型菊丸	1	6691	A	3	鎌倉後半	面戸瓦	25		
6285	A	1	菊丸(近世後半)	4	6694	A	1	室町	熨斗瓦	19		
6301	A	1	菊丸(近世後半以降)	2	6713	A	1	中世	鳥衾	7		
	B	1	菊丸(近世)	15	6714	A	13	興857	谷用丸瓦	1		
	C	1	室町	1	6716	A	3	近世前半	へら書隅切瓦	2		
6320	Ab	1	中世	4		C	1	近世後半	へら書丸瓦	1		
6348	A	1	近世末以降	1	6721	C	1	近世末以降	刻印付平瓦	1		
薬96		15	近世	7		J	1	近世	スタンプ付平瓦	4		
古代		5	型式不明	48	6768	B	1	型式不明	不明品	11		
軒 丸 瓦 計 (刻印 スタンプ付含む)				233	軒 平 瓦 計 (刻印 スタンプ付含む)				213	道具瓦計		82
丸 瓦				平 瓦	磚 (石含む)				凝灰岩・レンガ			
重量	1096.8 kg			3132.4 kg	20.6 kg			75.9 kg				
点数	6343			2224	16			50				

点の木簡が出土している。

護摩堂建設予定地の鐘楼西側の池ではヘドロを浚渫したところ、地山の青灰色砂礫層および粘土層を確認したが、古代～中世の遺構は残っていなかった。(高橋)

4 出土遺物

瓦磚類

第363次調査で出土した瓦磚類の一覧を表26に掲げた。このうち、薬96・321は平安時代の瓦、興857は近世の瓦である。大半を中・近世の瓦が占めるが、古代の瓦の中には特徴的な組合せの軒丸・軒平瓦がある。

奈良時代の瓦で最も量が多いのは、6138Bと6714Aのセットである。このセットは天平7年の法華寺造営時に用いられたものであり、創建瓦である6282と6721のセットを補足していたと考えられている(『平城報告XIII』)。ただし、今回の調査では6282と6721の出土点数は少ない。このほか、藤原不比等邸の所用瓦と推定されている6285Aと6667Aのセットも出土している。

平安時代の瓦で特徴的なのは、薬96と薬321のセットである。このセットは型式番号からも明らかなように、薬師寺からも出土している。元来は平安時代の法華寺に属するセットであるが、中世初期における薬師寺の復興の際に、法華寺から持ち込まれたと考えられている(『薬師寺発掘調査報告』)。(林)

土器・土製品

本調査で出土した土器・土製品は遺物整理用コンテナで33箱分を数える(図91)。内訳は、古墳時代の埴輪、7世紀以後の須恵器、土師器、黒色土器、奈良三彩、緑釉・灰釉陶器、瓦器、青磁、白磁、近世陶器などである。古代の遺物は少ない。

1・2がSK8662からまとまって出土した土師器2点で、1の杯Cには暗文は施されていない。7世紀前半の年代を与えられよう。3がこの遺構を埋める整地土から出土した須恵器杯B。8世紀初頭頃のもの。

4の須恵器杯B底部と7の須恵器杯蓋は光月亭の南側でみつかったSB8690の基壇裾にあるSD8688から出土した。いずれも奈良時代後半～平安時代初め頃のものであろう。奈良時代のものとしては、6の須恵器杯蓋がSB8601に関係するものとして地山直上から出土しているほか、5のような壺Lも出土している。そして8は平安時代に下がる須恵器杯蓋で、10の外全面にケズリの入る土師器杯や11・12の灰釉陶器などとともに本堂西南の調査区から出土したものである。9もこれらとほぼ同時期の溝SD8623から出土したケズリ調整によらない土師器杯である。

13は近世の瓦暗渠から出土した緑釉の杯であるが、これも同じく平安時代前半のもの。

14～16・21～25が光月亭北側で検出したSD8710の埋土から出土した遺物である。14～16の皿は体部1段ナゲ調整によるもので、いずれも14世紀頃と見られる。21の瓦器碗は高台が三角形の貼り付けに退化してはいるが、ややさかのぼって13世紀代のもと思われる。

また、22～25の羽釜は22・23の小形のもの、24・25の大型のものに大別され、さらに22が精良な胎土で薄く作られ、口縁部が面をなすのに対し、23は砂粒のめだつ胎土で厚手に作られ、口縁部も丸く納められるなど、個体差が認められる。また、煤の付着度合いもそれぞれ異なる。

こうした違いをもつとはいえ、これらは溝の埋土でも上層からほぼ形を保って出土したもので、溝の埋没年代

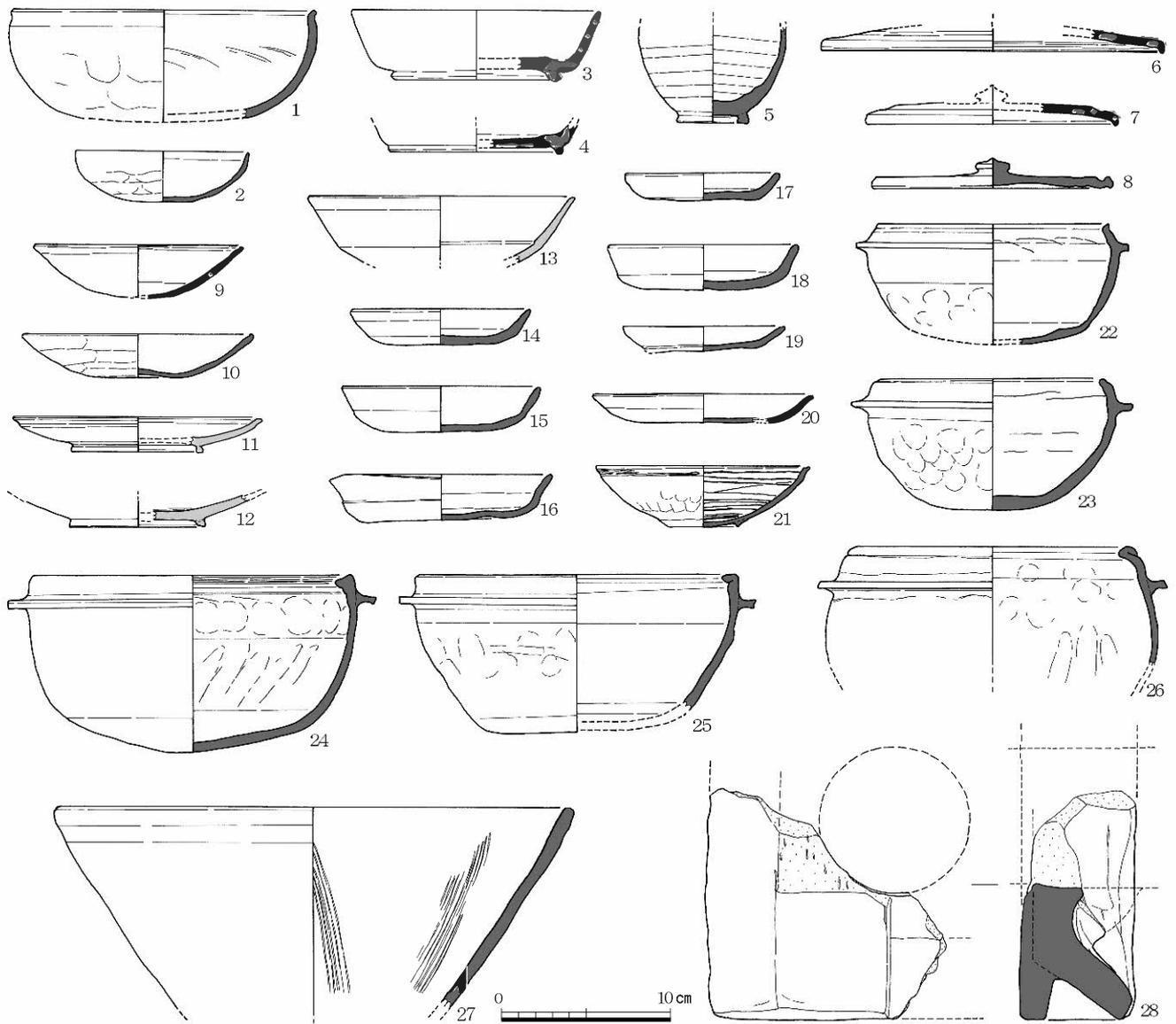


図191 第363次調査出土土器・埴輪 1 : 4

が14世紀頃であることを示している。

17・18の土師器皿と26の土師器羽釜はSD8684から出土したもの。上述のSD8710の出土遺物と形式的にも組成を含め出土状況としても類似しており、両溝の一体性を強くうかがわせる遺物である。その他の土師器としては、19の皿が鐘楼の礎石根石際で出土したもの。鎌倉時代に属する。また、20はSB8600の柱穴周囲から出土した土師器皿。穿孔が見られる近世のもの。

27はSD8710の埋没後に掘られた土坑SK8718から出土した瓦摺鉢である。楯目が比較的疎らに入っている。

28はSD8711から近世の瓦等に混じって出土した円柱をもつ家形埴輪の破片。隅の円柱から脱落した縁状の側廻りであるが、上面は柱心より左側に一枚粘土を重ねて水平面を拡張しているために、図に示すような断面形となる。

その他

SK8659から木簡10点(うち削屑2点)が出土した。釈読できる木簡は3点である。釈文を掲げたもの以外の二点

には、「□□〔八月カ〕」、「□〔ニカ〕」と記されている。

九月

六十三

四十八口

荷

(155) × (75) × 4 081

このほか、多くの板状、棒状の木製品、鉄釘、砥石とともに、漆器、鉾滓、鉄蹄、寛永通宝などが出土している。いずれも近世以後のものである。(高橋)

5 まとめ

今回の調査は非常に限定された範囲での調査であったが、これまで不鮮明であった現境内地における法華寺の伽藍配置の全容を明らかにした点や、掘立柱建物から礎石建建物への移行を確認した点など、不比等邸以前に始まる当地の土地利用の変遷を知る上で重要な成果をあげることができたといえる。ただし、北側でみつかったSB8690の性格や、中世の環濠状遺構の広がりなど、いくつかの点については課題を残している。(高橋・林)